



幌延問題と私たち

うずくもの……………	田代 慶子…	3
「幌延問題」とは……………	小坂 啓子…	4
私の幌延日記から……………	田代 慶子…	4
幌延問題と女たち……………	山内 恵子…	8
幌延問題を通して……………	小坂 啓子…	10
女たちのネットワークを……………	京田 初美…	12
決してあきらめないこと……………	那須 友子…	14
6月28日／幌延行……………	浅野 晃彦…	16
肝っ玉おばさんの悔恨……………	石田 和子…	17
核と緑は共存しない……………	平田 寿子…	18
自らを装う……………	丹藤 正代…	24
＜新連載＞働き続けた40年……………	辻 和子…	25
母子保健法への布石始まる ほか……………		27
女の講座・女のつどい……………		2

今月の編集はくあこら旭川＞ 112号 400円



<女のつどい・女の講座>

日	時	テ	ー	マ	・	主	催	者	会	場	・	連	結	先
10月15日(水)	10:18	熱帯林の破壊と日本人の消費生活	松井	より	△	アジアの女たちの会	▽	熱帯林の破壊と日本人の消費生活	松井	より	△	アジアの女たちの会	▽	熱帯林の破壊と日本人の消費生活
18日(土)	14:13	いまアウシュビッツの叫び	タデウス・ジャンスキ	▽	チェルノブイリで本当に何が起ったのか	豊崎博光	△	チェルノブイリで本当に何が起ったのか	豊崎博光	△	チェルノブイリで本当に何が起ったのか	豊崎博光	△	チェルノブイリで本当に何が起ったのか
19日(日)	13:17	家事労働と賃労働—主婦論争その後	上野千鶴子	△	今一度原発問題を考える	映画「世界は恐怖する」	△	今一度原発問題を考える	映画「世界は恐怖する」	△	今一度原発問題を考える	映画「世界は恐怖する」	△	今一度原発問題を考える
21日(月)	18:18	フェミニズム—日本の運動のこれから	△	反核文化祭実行委	▽	避妊の歴史—産むこと産まないこと	△	避妊の歴史—産むこと産まないこと	△	避妊の歴史—産むこと産まないこと	△	避妊の歴史—産むこと産まないこと	△	避妊の歴史—産むこと産まないこと
22日(火)	18:18	「反原子力インタナショナル」国際会議に出席して	高木仁三郎	▽	秋の女性労働教室とပါတタイマー講座	（亀戸労政事務所03「68226321」）	▽	秋の女性労働教室とပါတタイマー講座	（亀戸労政事務所03「68226321」）	▽	秋の女性労働教室とပါတタイマー講座	（亀戸労政事務所03「68226321」）	▽	秋の女性労働教室とပါတタイマー講座
23日(水)	18:10	太平洋の核実験—放射能に被われた島からのメッセージ	△	大平洋の核実験—放射能に被われた島からのメッセージ	△	子どもに心みえますか	▽	子どもに心みえますか	▽	子どもに心みえますか	▽	子どもに心みえますか	▽	子どもに心みえますか
24日(金)	18:00	大いに語ろう—とんでけ原発風船行動	実行委員会03「3082219」	▽	働くことと産むこと—パート・派遣法のわらい	柴山恵美子	△	働くことと産むこと—パート・派遣法のわらい	柴山恵美子	△	働くことと産むこと—パート・派遣法のわらい	柴山恵美子	△	働くことと産むこと—パート・派遣法のわらい
25日(土)	13:18	うたコミ「わが街メルトダウン」	館野公一	▽	共修をどうすすめるか—文部省の狙いと私たちの願い	（教課審中間まとめを受けて）	△	共修をどうすすめるか—文部省の狙いと私たちの願い	（教課審中間まとめを受けて）	△	共修をどうすすめるか—文部省の狙いと私たちの願い	（教課審中間まとめを受けて）	△	共修をどうすすめるか—文部省の狙いと私たちの願い
26日(日)	12:15	魅力とめよう大行動（連絡先：河野貴代美	△	魅力とめよう大行動（連絡先：河野貴代美	△	原発とめよう大行動（連絡先：河野貴代美	△	原発とめよう大行動（連絡先：河野貴代美	△	原発とめよう大行動（連絡先：河野貴代美	△	原発とめよう大行動（連絡先：河野貴代美	△	原発とめよう大行動（連絡先：河野貴代美
27日(月)	18:18	「職場のストレスと健康管理」	石田一宏	▽	「もうひとつのヒロシマ」完成記念上映会と独舞	（カン・キ・ソン）	▽	「もうひとつのヒロシマ」完成記念上映会と独舞	（カン・キ・ソン）	▽	「もうひとつのヒロシマ」完成記念上映会と独舞	（カン・キ・ソン）	▽	「もうひとつのヒロシマ」完成記念上映会と独舞
30日(木)	18:18	生命科学と女たちの未来「こまでできた生命操作」	米本昌平	▽	生命科学と女たちの未来「こまでできた生命操作」	米本昌平	▽	生命科学と女たちの未来「こまでできた生命操作」	米本昌平	▽	生命科学と女たちの未来「こまでできた生命操作」	米本昌平	▽	生命科学と女たちの未来「こまでできた生命操作」
31日(金)	13:19	「職場のストレスと健康管理」	石田一宏	▽	「もうひとつのヒロシマ」完成記念上映会と独舞	（カン・キ・ソン）	▽	「もうひとつのヒロシマ」完成記念上映会と独舞	（カン・キ・ソン）	▽	「もうひとつのヒロシマ」完成記念上映会と独舞	（カン・キ・ソン）	▽	「もうひとつのヒロシマ」完成記念上映会と独舞
11月1日(土)	18:18	生命科学と女たちの未来「こまでできた生命操作」	米本昌平	▽	生命科学と女たちの未来「こまでできた生命操作」	米本昌平	▽	生命科学と女たちの未来「こまでできた生命操作」	米本昌平	▽	生命科学と女たちの未来「こまでできた生命操作」	米本昌平	▽	生命科学と女たちの未来「こまでできた生命操作」
2日(日)	10:13	生命科学と女たちの未来「こまでできた生命操作」	米本昌平	▽	生命科学と女たちの未来「こまでできた生命操作」	米本昌平	▽	生命科学と女たちの未来「こまでできた生命操作」	米本昌平	▽	生命科学と女たちの未来「こまでできた生命操作」	米本昌平	▽	生命科学と女たちの未来「こまでできた生命操作」
3日(月)	13:19	生命科学と女たちの未来「こまでできた生命操作」	米本昌平	▽	生命科学と女たちの未来「こまでできた生命操作」	米本昌平	▽	生命科学と女たちの未来「こまでできた生命操作」	米本昌平	▽	生命科学と女たちの未来「こまでできた生命操作」	米本昌平	▽	生命科学と女たちの未来「こまでできた生命操作」
4日(火)	18:18	生命科学と女たちの未来「こまでできた生命操作」	米本昌平	▽	生命科学と女たちの未来「こまでできた生命操作」	米本昌平	▽	生命科学と女たちの未来「こまでできた生命操作」	米本昌平	▽	生命科学と女たちの未来「こまでできた生命操作」	米本昌平	▽	生命科学と女たちの未来「こまでできた生命操作」
5日(水)	13:19	生命科学と女たちの未来「こまでできた生命操作」	米本昌平	▽	生命科学と女たちの未来「こまでできた生命操作」	米本昌平	▽	生命科学と女たちの未来「こまでできた生命操作」	米本昌平	▽	生命科学と女たちの未来「こまでできた生命操作」	米本昌平	▽	生命科学と女たちの未来「こまでできた生命操作」
6日(木)	18:18	生命科学と女たちの未来「こまでできた生命操作」	米本昌平	▽	生命科学と女たちの未来「こまでできた生命操作」	米本昌平	▽	生命科学と女たちの未来「こまでできた生命操作」	米本昌平	▽	生命科学と女たちの未来「こまでできた生命操作」	米本昌平	▽	生命科学と女たちの未来「こまでできた生命操作」
7日(金)	13:19	生命科学と女たちの未来「こまでできた生命操作」	米本昌平	▽	生命科学と女たちの未来「こまでできた生命操作」	米本昌平	▽	生命科学と女たちの未来「こまでできた生命操作」	米本昌平	▽	生命科学と女たちの未来「こまでできた生命操作」	米本昌平	▽	生命科学と女たちの未来「こまでできた生命操作」
8日(土)	18:18	生命科学と女たちの未来「こまでできた生命操作」	米本昌平	▽	生命科学と女たちの未来「こまでできた生命操作」	米本昌平	▽	生命科学と女たちの未来「こまでできた生命操作」	米本昌平	▽	生命科学と女たちの未来「こまでできた生命操作」	米本昌平	▽	生命科学と女たちの未来「こまでできた生命操作」

幌延問題と私たち



うずくもの

田代慶子

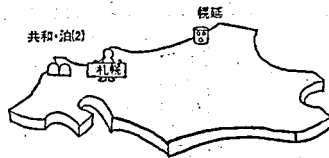
上海で水を飲むのは御法度^{ほうど}だった。宿には各部屋ごとの水差しに、一度煮沸してさましたものが置かれていた。だが、水差しの底には、何ものかの沈澱していることが珍しくなかった。私は、ふだんからあまり水を欲しがる体質ではなかったせいもあり、足かけ五日にわたる滞在期間中、ついに一滴もその湯ざましを口にするのがなかったのである。味見くらいしてもよかったのにと思ったのは、機上の人になってからであった。

中国では、オンザロックの習慣がないという。したがって、氷もふんだんには置いていない。真夏のことでもあり、日本の飲み助たちは、いつも出来たての氷を待ちわびていた。ホテルの売店のジュースは、鍵のかかった冷蔵庫の中で売られていた。

日本にいた時の癖で、部屋を出るときは必ず灯を消していた。ところが、外出中にベッドメイキングされた部屋には、昼であれ夜であれ、決まって灯がついているのだった。そういえば、ホテルの窓から見えるアパートでも、その何軒かが朝まで灯をつけっぱなしにしていた。中国式のもてなしの心だと私は判断した。この国では、電化がまださほど進んではないおかげで、たっぶりの灯でもてなす心のゆとりがあるかもしれない。電化製品のうち、上海の商店街などでもかなり普及しているなと感じたのは、扇風機くらいのものである。少なくとも、今の中国には、原子力発電による核のゴミ捨て場の心配など、無縁であらうと思われた。

旅から帰って数日後、「幌延で動燃がボーリング調査を強行」とのニュースが飛びこんできた。私はなぜ、いま「幌延」ではなくて「上海」だったのかと、うずくものがあつた。

「幌延問題」とは…



幌延町は一八九九年(明治三十二)の開拓以来、農業を中心に発展してきたが、高度経済成長の訪れとともに離農が相次ぎ、町人口は一九六〇年(昭和三十五)の七千五百人をピークに過疎化が進み現在約三千七百人である。政府のエネルギー転換政策に伴う炭鉱閉山、そして国鉄の合理化によ

私の幌延日記から

田代 慶子

一九八五年十一月二十三日

——外側から幌延問題をもつめて

「幌延誘致に反対している人たちは、たとえば候補地が九州に変更になったとしたらそれでも反対運動を続けるのだろうか？」高二の

る貨物駅の廃止なども人口の減少を加速していった。一方で基幹産業の酪農は、乳価の伸び悩みや、国による生産調整で振るわず、町の経済は、農業基盤整備、公共施設建設、道路工事等、公共事業依存型の体質を強めてきたが、それも開発予算の大幅削減によって打撃を受け、町財政は悪化するばかりである。

一九七九年、故作野町長は、「過疎脱却」「地域振興」の足がかりとして、原子力施設の誘致に乗り出した。しかし地盤の弱さもあって、原子力発電所は泊村(北海道後志郡)に、「低レベル」処理施設は下北に決定し、誘致は空振りに終わった。ところが、一昨年(一九八四年)四月、成松現町長を先頭に、動燃(動力炉核燃料開発事業団)による幌延町へ

息子が、テレビのニュースを見てそう言った。「うーん。自分たちの頭に火の粉が降りかかりそうになったので、とにかく「イヤだーっ」て、声を出すところから始まったんだらうけど、でも、根っこのところから主體的にこの運動にかかわっている人たちなら、おそらくそうすると思うよ」と答える。

過日、社会党の国会議員が「核のゴミはゴ

の「高レベル」施設立地計画が、突然浮上してきた。それが「幌延問題」の発端である。

七月には町議会で誘致を決議。その頃から地元や周辺市町村で、反対する市民グループが続出。労働組合、農業連盟も反対を表明。これを受けて横路北海道知事(革新系)も、「幌延問題」を北海道全体の問題であるとして、反対派の多いことを指摘したが、保守系の多い道議会では、誘致推進を議決した。

地元町民 近隣市町村の動揺・反発の中で、動燃は、一九八五年十一月、抜き打ち的に調査を強行して足掛かりとし、今年の八月、機動隊と警察を動員して浅層ボーリング調査を強行、着々と立地に向かっていく。

(小坂記)

ミを出した場所で処分すべきだ」と言っていた。それはそうかもしれないのだが、その発言の中に、「ひとたび侵入されると、味方今までトコトン踏みにじられる怖さ」を感じて



しまった。東海村にも、かつて反対を唱えた人たちはいただろうに。

そもそも、石油に代わるエネルギーは原子力でなければならないのかどうか……。

害を差し引いてもなおかつ、開発をすすめる値打ちがあるのだろうか？ その値打ちには、誰にとってのものなのか？

どうしても必要であるなら、害をなくしたり減らしたりの工夫がなぜ緩慢なのか？

たとえば、フランスのサン・マロというところには潮汐発電所があるというが、まだ本格的には実用化されていないという。何がネックになっているのだろうか？（海の波、潮、風などがおこす無限の力は、動力化されて熱や光を供給することが可能なのだが、この種の資源の開発にはほとんど手がつけられていないのが現状——絵本『海』佑学社刊より）

資源を長持ちさせようとの呼びかけも、もっと熱心に繰返し行なわれるべきだろう。

〈幌延高レベル核廃棄物問題を考える旭川市民の会〉への入会を、数か月前から友人にすすめられているのだが、入ったとしても精力的には動けないことが目に見えていることもあり、まだ入らずにいる。

かねてからやりたいと思っていたことに時

間を振り向けることのほうが、今の私には大切らしいのである（自分の近未来の幸せを今の一番に考えてしまう）。その発想が、幌延誘致賛成派とみなされている地元商店街の人たちと同じであることに気づいて、後ろめたくなる。安易にエネルギーを浪費している人たちとも同じ穴のむじな。

今は最前線には立てないけれど、側面から私にできることをみつめて、何らかの力になりたいものだ。

一九八六年四月二十九日

——七時間の手伝いから見えてきたもの

幌延に関するチラシを市内の全戸に配布する計画があるという。「家のほうにも撤く時は言っておね。それくらいなら手伝えるから」と言っておいたら、「四月二十六日に行なう」旨の連絡が入った。

区域を六つに分割し、二人ずつ組になって、二時間ほどで配り終えたのだが、チラシが大量に残ってしまった。地域での四月三十日の講演案内も入っていたので、四百五十枚も没にするのは印刷に要した労力をドブに捨てる行為のような気がして、隣接の町内に配ることを申し出た。翌二十七日は雨。傘を持たずに自転車に乗っていたせいか、土砂降り

というわけでもないのに、たった一時間でオーバークートから雨水がしたり始める。二十八日、仕事を終えた後、二時間かけて配布。足にかなりの疲れを感じたのでやめる。

二十九日、仕事を終え、家族の昼食の支度をしてから二時間、ようやく配り終える。延べ七時間を要した。今の時期に七時間を費やすことは、正直言って痛い。だが、今の私には、こういった形での応援しかできそうにないから。それに、矢面でがんばっている人たちの場合は、七時間どころではないのだ。

今回の経験から、チラシ配りはたくさんの人でやるに限ると感じた。年会費を払ってくれている（今のところ、おかねを払う代償に情報を得ているのみの）会員の中にも、こういった作業に時間を割くことのできる人が、呼びかけさえすれば案外いるのではないかと？

たくさん人間でこなせば、一人当たりの作業量は少ななくてすむのだし、連帯感や充実感も共有できて輪も広がって、いいことづくめだと思ふのだが、そこらへんの組織づくりが手薄だと感じた。私に時間がもう少しあったなら、つなげて広げる役目を引き受けてあげるんだけど……。

チラシひとつ配るにも、とかく町内会を利

用したがるPTAの団体に比べると、ひたむきで潔くて私は好きなのだ、講師をやれるくらいに学習を積んでる人や現地行きが可能な人たちを、チラシ配りで消耗させたくはない、とも思う。

一九八六年九月十五日

——二百五十字の投書

四日ほど前に投函した私の投書が、北海道新聞の「読者の声」に載っていた。

《選挙で庄勝した自民党の議員さん方に、訴えたいことがあります。今回の衆院選、私は自民党の候補者に一票を入れました。でもそれは、自民党をまるごと支持していたからではなく、ひとつには、自民党の議員さんの中にも幌延問題に慎重な姿勢の人が必要だと思ったからでした。このあいだ、知人と話していて、私と同じ考えの人がほかにもいたことを知り、投書する気になった次第です。大勝したからって、どうか勘違いしないで下さい。ご自分の公約のどこに選挙民がひかれたのかを、いろんな角度から見つめ直していただきたいと願っています》

投函してから載るまでの間、「載りますように」と「載りませんように」とが、ひっきりなしに交錯していた。というのは、この投

書は、私にとって是一種のストリップ的行為だったからである。

実家の父は、この十数年来、自民党の某候補者の熱烈な支持者であった。当選したからといって急にふんざりかえることがなく、自らは質素な家に住み続けているところが、潔癖で正義漢の父にはたまらぬ魅力だったのだらう。その候補者がかもしも今回落選したならこの先二度と立つことはできないだらう。金銭的にも精神的にも……、と父が言う。選挙運動の期間中、癌の持病のある父が、自分の養生をあとまわしにして彼を支え続けていた。

「選挙は社会党の△△ということになってるからな」——職場から帰った夫が、ある日指令の伝達めいた口調でそう言った。本人の意志も確かめずに、いつもいつも勝手に票よみしてナニサ。社会党はそれでも革新なの？口には出さず腹の中で造反する私。

選挙当日、誰に投票したかは、本人にしかわからないのだ。本人が口をすべらさない限りは。「母さん誰に入れたの？」と子どもに聞かれた時でさえ、「それはプライバシーにかかわる問題だからノーコメントよ」とはねつけていたのだったが……。

ちょっと長めの旅から帰ってまもなく、「幌

延で動燃がボーリング調査を強行」とのニュースが流れた。私の持っているエネルギーを、ありきたりではない発想に転化して反対派の人たちに今こそ注いであげたい、とそのとき思った。

数年前、自民党の某候補者の奥さんが土下座をしていた風景が思い出された。支える人の、なりふり構わぬその行為には、いじらしさの背中に凄みが貼りついていて。今の私に土下座はできそうにない。だが、投書という名のストリップなら、できるかもしれない。

あんたんとこの奥さん、自民党に票入れたんだってね／新聞に投書なんかせずに、直接言ってくればよかったのに／あの奥さん、革新のような顔してて、実は保守だったんですって。節操のない人って、いやあねえ／過激なことばかりやっている、自民党は今に国民からそっぽを向かれてしまうのではないでしょう。自民党の延命のためには……。

闘い疲れた人（かつては革新だと自称していた人）の決まって吐くセリフに、「トコトンひどくなつちまえばいいんだよ。そしたら国民が気づくだろうからさ」というのがある。だが、私はそれまで待つてはいられなかった。核のゴミを過疎地に押しつける身勝手さを阻

止する一助になるなら、代わりに自民党が延命したとしてもやむをえない、と思ったのである。たった二百五十字ほどの投書の裏にこれだけの葛藤があったことを、知る人のあろうはずもない。

一九八六年九月十六日

——いいなあコレクション

十月二十六日は原子力の日だという。この日に向けて新聞に意見広告を……との提案が会員の一人から出されていた。だが、今からでは間に合うまいということで、その計画は見送る形となった。「もったいないよねえ」という声が、くすぶりながら尾を引いていくのが見えたと思った。そうとも！ ころびっばなしでいることはないのだ。そのくやしさを、この先の運動の養分にしてやろうではないか。「間に合うまい」との判断には、「今の私たちの力量では……」という注釈がひそんでいる。要は力量がふえればいいのだ。広げてつなげてふやす努力を日常活動の中で積もらせていく。——その道しるべを、「無念」の経験は、置きみやげにしていってくれたのだ。

「駕籠に乗る人かつぐ人、そのまたわらしを作る人」という言葉がある。その先を私なり

にもう少し続けてみるなら、わらしの材料であるところのわらを作る人（稲を作る人と言ふべきか）がいて、良質のわらを作るための肥料を作る人がいて、良質の肥料を作るために良質の飼料を作る人がいて……ということになる。私なんぞにはさしずめ、肥料を運んだり飼料の品種改良を考えたり分野が似合いうような気がしているのだが……。

・この会へ晩延高レベル核廃棄物問題を考える旭川市民の会〉の例会に初めて顔を出してみても、いいなあ、と思ったのは、駕籠に乗る人やかつぐ人が自分たちを支えてくれている人たちのしんどさを感じやる気持ちを持ち続けていることであつた。それは、もしかしら特定の人が乗りっぱなし、かつぎっぱなしというのではなく、ある時はわらしを作り、またある時は肥料の提供者を探しに歩いたりしているせいもあるのでは？と私には思われた。

「現地の人たちが倒れないでくれよ、って気持ちで運動に参加してるんだよね」——労働組合畑の、私よりも年上っぽいおじさんの口からそのひとことがこぼれ出た時、私はすっかり熱い握手を交わしたい気持ちに駆られていた。長いこと労働組合の水に浸っていてもなお、腐らずにいる人がここにいた

のだ。労働組合にも、きつとピンからキリまであるのだろう。快い酔いが、自分の心身に広がっていくのを感じていた。

これからの私、こんな「いいなあエピソード」を拾い集めるのが楽しみで、この会に出てくることになりそう。

一九八六年九月十八日

——私の提案——逆転の発想から

『徹子の部屋』に伊奈かつべいさんが出ていた。

「ラジオだから、何でもできる」と彼が言った。そうか！ そういう考え方も可能なんだ！！——百八十度逆転の発想——。

ひとり身だった、日高地方を旅したことがある。真夏だというのに、襟裳岬の突端はコートのボタンをかけていてさえ、浜風がどこからともなくしのびこんでくる状態にあった。何げなく足許を見ると、そこに、タンポポほどの背丈の赤紫色の花が一面に咲いていた。浜風の思いのままにゆさぶられて、ちょっとの間もじっとしていることを許されないまま……。こんなところに、なんという名の花だろう？——しゃがんでよくよく見ると、それはあざみの花であった。山で見かけるあざみならおとなの背丈ほどにも伸びられ

るというのに、襟裳岬のあざみはちんちくりんのまま、それでもちゃんと花をつけていたのである。後年、森進一さんが「襟裳の春は何もない春です」と歌ってヒットしたとき、

私は、その歌の作詞家に文句がある、と思った。襟裳には、私の知ってるだけでもアボイ岳があり、その山には高山植物があり、海からはコンブやシシャモとれる。襟裳の春は本当に何もないのだろうか？ あなたの言う「何も」の「何」とは一体何なのか？ もしかしてあなたは、芽吹き始めていたあざみたちを、それと知らずに踏んづけて歩いていたのではありませんか？——否、みだりに人を責めることはすまい。私だって、襟裳の夏を知らなかったなら、同じことをしていたかもしれないのだから。それとも、二十年以上も前に私が見たあざみは、既にとくに絶滅してしまっていたのだろうか？

幌延の冬には、もしかしたら何もなかったかもしれない。だが今は、年中「何か」がある。その「何か」とは、「日本中に知れわたった町の名」である。

「あゝ幌延がね、核のゴミ捨て場をキャンセルして、地道に一村一品でがんばってるん

だって”

”勇気ある選択だったね”

”私も、販売ルートの支えになってあげなくっちゃ”

「核廃棄物施設に代わる強力な何かを！」

とは、これまでも心ある人々が口にしてきた言葉であった。今こそ、その模索を行動化してみてはどうだろうか？ 反対運動と併行して、町民を主体としたプロジェクトチームを作るとかして……。本気で取り組んだなら、道がボカット開けないとも限らない。今ならまだ間に合う。人手が足りないというなら、何かの力になりたいとうずく胸かえてきつかけ待ってる人たちを探して歩こう。

私が、この運動にいつまでかわわっていられるかの保証はない。だが、できるぎりぎりのときまで、できる限りの応援を、（自分も大切にしながら）惜しむまいと思っている。

幌延問題と女たち

ちやうどみくら
あかしくうぐいし
ほくらすまほしきわ



山内 恵子

原発について、はじめて深く考えさせられたのは、「原発」の写真集を出された樋口建二さんの講演を六年ほど前に、旭川でお聞きしたことからでした。

それまでは、原子力発電に多くの問題があるとは思っていましたが、すでに被曝者が出ているということについては何も知りませんでしたので、原発で働く下請け労働者、孫請け労働者が被曝し、次々と病気になるってこと、しかも、因果関係が明らかにされず、労災も認められていないことなどをお聞きして、とてもおどろきました。

そして、何よりもおどろいたことは、この被曝は、事故によって起こったものではなく、日常的なおこなわれる、パイプに詰まったゴミを取りのぞく作業とか放射能除染作業によつての被曝であるということでした。放射能が付着してもシャワーで洗浄するだけというのですから、おそろしい話です。



定期検査中の炉心部入口での作業は、下請け労働者による人海戦術で、数分刻みの作業をするというのですから、働かせている側は、この危険性を充分知っての上でのことだと思います。

現実には、原発が運転開始されて二十数年、あちこちに被害が出ているというのに、日本では、被曝者ゼロという安全神話がまかり通っているのです。

政府が知らせようとしないのなら、動燃が安全と言いつづけるのなら……、私たちは、別のルートで、本当のことを知る努力をしなければならぬと、つくづく思ったのです。

反核・原発副読本編集委員会の編集による『ノンちゃん』の原発のほんとうの話』によると、一九八五年の一年間だけでも、日本の原発事故は十八回も起こっているというのです。

今年四月二十六日に起こったチェルノブイリの原発事故の影響は、もう北海道にも現われていて、北大の農地で放射能が検出されたということ。今回の事故で数億人の被曝者があり、何万人、何十万人の死者・発病者が出るだろうと言われています。ソ連は今後五十年以上、被曝者問題をかかえることになる

るだろうとも言われています。

安全神話は、スリーマイルアイランド原子力発電所放射能漏れ事故や、今回のチェルノブイリの事故で完全にくずされたはずです。国内においても、敦賀原発等の事故で、安全は保障されないことを知ったはずで

す。それにもかかわらず、北海道の泊村に原発を建設し、幌延に、高レベル放射性廃棄物貯蔵施設をつくらうとする政府、動燃に、強い憤りを感じます。特に幌延については、知事をはじめ多くの道民が、「北海道を核のゴミすて場にするな!」ということで強く反対している中で、立地環境調査を強行してきているのです。この背景に、地元民の「過疎脱却を原発で」という、悲しい誘致の声があることも考えさせられます。

この間、地元で反対運動をしている人々、全道労協の人々、市民運動をしている人々の地道な反対運動がありました。調査を阻止できなかったことが残念でなりません。チェルノブイリの事故以降、マスコミも反対の声をとりあげるようになってきていますが、このままでは、歴史に禍根を残すことになってしまいます。

いま、〈あこら旭川〉の仲間も、〈幌延高

レベル核廃棄物問題を考える旭川市民の会〉の一員になって反対運動をひろげている人、〈市民の会〉の主催する集会に参加している人、現地での抗議集会に参加してきている人等々、行動しはじめています。

〈旭川市民の会〉でとりくんだ映画『シルクウッド』上映会は、赤字覚悟で一日三回の上映をしましたが、すべて満員で、黒字上映となったそうです。何かしなくては……と思っている人々が、この映画を見にきたのだと思います。絶望することはないと思いました。米核燃料工場の汚染問題を告発した女性研究員カレン・シルクウッドのナゾの死の事件は、会社側が責任を認めないまま遺族に二億円の補償金を支払うことで終わったようですが、この映画は、「運動は一人からはじまる」という、運動の原点を教えてくれました。「一人では何もできない」などと居居つてはならないとつくづく思いました。

TVの『チャイナ・シンдрーム』は、チェルノブイリを予言しているものでした。このテレビをビデオに残した仲間もいます。一人でも多くの人に知らせていくことのために、ビデオを見る会も開きたいと思っています。私の属している〈北海道母と女教師の会〉

では、十月十九日(日)に、バスで幌延に行くことを計画しています。我が子をつれて行くと言っている母親もいます。現地の女性と交流を深め、私たちは何ができるのかを考えてみようと思っています。もしかしたら、誘致運動を進めている人々の心のゆれにふれられるかもしれないという期待もあります。

今、私たちは、誰かの指示を待つのではなく、自分のできることからやってみる、そして情報を交換しあうネットワークをつくり、連帯の輪をひろげ、運動をひろげていくことによって、道が開かれると信じて行動しはじめました。

映画『カラーパープル』のセリーとソフィアや、シルクウッドに、その勇気を学び、二十一世紀に生きる子どもたちに、緑の美しい北海道の自然と男女平等の社会を手わたしたいものだと思います。

幌延問題を通して

小坂 啓子

一九八四年一月、九万人の署名をもって、札幌市へ直接請求を起こした、女が中心になった運動があった。「合成洗剤を追放しよう! 直接請求実行委員会」——北海道でこれほど

盛り上がった草の根運動は例がなく、政党を超えて市民の厚い支持を受け、目標署名数を大幅に突破した。しかし、市議会では、政党色で振り分けられ、賛成は社会党二十、反対七十(自民・公明・共産はか)で否決された。

旭川でこの運動を、「草の根運動の明るい未来への一ページ」と楽観視していた私は、残念ながら一気持ちで報告会に出席した。運動を推進してきた会員が、下口唇をかみしめ、涙を抑えて語るのを聞いて胸がふさいでいた。

一同が皆うな垂れている時、伊藤みえ子さん(美唄市消費者協会会長)が立ち上がって話し始めた。「この運動は、形の上では負けたけれども、私たちが負けたのではない。私たちの運動の成果として、多くの人が石けんを知った。私たちの目的は、多くの人に石けんを広めていく運動なのだ。まだ一歩なのだ。私たちは石けんを広めることで、文化を担っているのだ。石けんを使う文化を作っているのだ」と。この力強い発言に、胸のつかえがスッと消えた。「文化をつくる」という言葉は、その後、私の大切な生活の尺度となった。



翌年二月、尊敬している方から「幌延の反対運動をいっしょにやってみよう」と誘われて、へ幌延高レベル核廃棄物問題を考える旭川市民の会」の事務局長になった。楽観的な私には、この運動はやすやすと勝てそうな運動に思えた。「世論の支持」「高レベルの危険性」「知事も反対」「幌延の地盤の弱いこと」等々、反対運動にとって明るい材料ばかり見えた。また、男女・年齢・職業の様々な、魅力のある仲間と会うのも楽しかった。

八月三十日に、動燃は秘密裏に調査機材を搬入し、実質的な地質調査を開始した。私は市民の会として、三十一日、九月一日と抗議行動に参加した。労組の赤旗と農連の緑旗が並び、千五百人ほどの大集会であった。小さな市民の会グループは端のほうで風船をふくらまして、それにマジックで字を書くのに忙しかった。後日、朝日の記者に、私たちのグループはファッショニックで、労組のような怒りとか力強さがなくて取り上げにくいと言われたけれど、労組風では、私たちが参加している感じが出ない。私たちは動員されたんじゃない、自発的に三時間半も車に乗って来るのだ。数の一人に染まりたくない。私たちのグループは、女がいつも半分はいる。元気な女

のイメージを託してカラフルな風船をいっぱい持つ。思い思いの言葉を書く。「ほろのべを避けて未来は語れない」「この夏、ほろのべ震源地」「核廃施設を東京に」

現地の入り口にはパトカーが並び、鉄条網と金網をめぐるせて、その中で大勢の機動隊員が桶を持ち、大勢の作業着姿の私服警官と守っている。金網の外の私たちの側にも、バス一台分の機動隊が百メートルほど離れて待機していた。私たちのグループの代表がハンドマイクで「警察や機動隊の諸君、君たちにも女房子どもがいるだろう。僕たちは女房子どものために運動してるんだ。こっちへ来ていっしょに運動しよう。そこで僕たちを阻んでいてはダメだ」と抗議する。警官たちは、あちこちで録音テープを回し、写真を撮り、メモをする。あまりにも、ものものしい警戒が私たちに向けられている。「なぜ、どうして……」苦しいほどに胸がつまった。

型通りに、労組の委員長やら、社会党の国會議員が動燃の責任者に抗議して終わる。

私たちのグループは、幌延町でわかりやすい学習ビラを配ることにした。十二名で分けると、小さな市街地はすぐ終わってしまいうだ。チャイムを押して、手渡しする。女か

ら女へメッセージ。幌延の女たちは、一様に言う。「私も危ないと思っている」「皆反対なのよ」「がんばって、私の分まで運動して」「私たちの声は議会には届かない。一軒だけ、鉄工所の奥さんが、「安全だって聞いています。東海村へも見学に行つて、安全に操業しているのを見て来ました」と言う。「東海村には、核廃棄物は置かないとの取り決めがあるのを知っていますか」と聞くと、「知らない」と言う。その隣の家では、「隣で賛成してるから、反対でも、表立って言えないの。隣の息子は東海村の再処理工場に就職したのよ」と教えてくれる。現地幌延町の住民は、この問題に神経をとがらせていながら、学習会も持てず、情報も新聞以外に入らない状態であった。

私たちのグループは、現地への取り組みの必要を強く感じた。

九月のカレンダーに、夜、夕飯を家族と共にできない私の黄色い○印が並ぶ。仕事とへ幌延」とへあごろ」と会社につきあひと。お芝居の一日もプラスして十九日。夫から一言、「どれかやめなさい」。

仕事はこれでもかなり削っている。へあご

ら」の集まりと会社につきあひを減らす（会社でも課長につきあひが悪いと言われている）。こう忙しいと、家族と共に夕飯をとるのとが、とても大切な時間であったことがよくわかる。夫にも子どもにもすまないと思う。再び夫君、「たまには家庭サービスマンとしてくれよ。妻と子が父親に言うのとは逆の構図を踏まえて言うのだから、従わざるを得ない。九月二十一日、紅葉を訪ねて登山する。北国の、とりわけこの時期の高山の紅葉は美しい。それにしても家庭サービスマンは疲れる、と自分に苦笑する。

そんな中で「幌延問題」がやっと思えてきた。「幌延問題」は、単に幌延町だけの問題ではなく、北海道だけの問題でもなく、日本のエネルギー政策が間違っているわけであり、米、ソの「核」の輸出産業政策に端を発しているこの問題は、文化の貧困さに起因しているのだ。

生物の長い歴史の中の、ほんの一時期に、北半球の大国に住む現代人たる我々が、ほんの一時期の便利さのために、半永久的な汚染を作り出す。自分たちの便利さのために電気を大量に消費し、足りなくなったら原発を、核の危険は遠隔地に、という利己主義の文化

が原因なのだ。

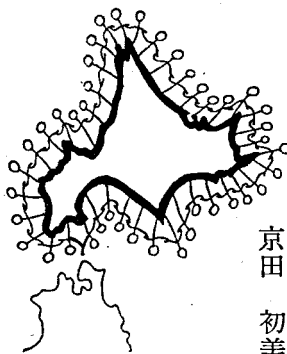
そう言えば、我々にはあり余る食糧に囲まれて、飢餓に苦しむ人々の土地で作られたコーヒーをすすっていた。自分たちの食に対する、飽くことなき欲求を満たすために、多くの人がとが死んでいくことを、ついこの間まで知らなかったではないか。コーヒーを減らし、バナナもやめて、食べ物を捨てないように気を使うようになった。「幌延問題」も、全く同じ構図なのだ。六年生の息子が言った。「幌延に核のゴミを持って来ないようにするのは、原発をやめればいいんだよ」。そのとおりだ。そして原発をやめるには、電気をほんのちよっぴり節約すればよいのだ。

〈あごろ〉の読者たちよ。北海道では、国鉄はちよん切られてズタズタ、炭鉱は閉山になって町は寂れ、農家は減反で米が作れず、失業者が増大して、不景気が充満している。

あるのは、美しいが非現実的な自然。ネオン輝く都会に住むあなたたちは、電車に乗ってグリーンを聞きに行く。あなたたちが生み出した人類史上最悪の汚物を、あなたたちは電車に乗る時、電気釜のスイッチを入れる時、テレビを見ている時、貧しい北の国に押しつけようとしているのだ。

幌延を考える女たちの ネットワークづくりを

京田 初美



幌延高レベル核廃棄物施設問題反対運動について、最初の出会いがいつだったのかよく覚えていない。ただ危険なものが北海道に持つてこられるらしいということに、子どもを持つ親として不安を感じた。なぜ北海道に！ということになったのか知りたくて、調べてみた。

第一に東京から遠いということ、おまけに幌延町長が、過疎対策の一環として動機に施設誘致を推進するように懇願しているとか、まったくおかしいことが大手を振ってまかり通る時代なのだと、暗たんとしたものだ。それにしても、本能的に危険らしいと感じただけで、いったい放射能とはどんなものな

のか、凡人の私にはさっぱりわからず、また、「北海道民の幌延についての関心がうすい」と嘆く声を聞いて、その無関心層に位置している自分を再確認した。

さすがの私も、これはわからないということではすまされないと考え、手に入る情報（といっても数は限られてしまうけれど）を集めてみた。その結果、第一番目に了解したことは、各放送局の幌延問題についての取扱いは、報道態勢をとる番組を制作していたけれど、問題はNHKだ。ほとんどノータッチというか、無視という態度（自民党の顔色をうかがいながらの行動しかとることができないのなら、それは、それで結構、そのかわり名称を「政府おかけ放送局」とでも変更してほしい）、もうこのことだけでも、幌延についてはおおよその見当がついたようなものだった。

しかし民放でも電力会社提供の「原子力は安全、なくてはならぬもの」等のコーマーシャルが道民の生活にジワジワと入りこみ、「原子力がなければ電気がつかない」という誤った常識を持たされてしまっている。「お上の言うことだもの、まちがいないべさ」という言葉は、老人、若人と無関係にあちこちで聞く

ことができる。ほんとうに、おひとよしの北海道民は、ばかにされっぱなしの現実をもっとしっかりつかみとるべき時期がきたように思う。十月末の原子力の日には北海道電力は新聞に大々的に原子力の宣伝をのせるといふ。私たちの払った電力料金からの支出で、宣伝費とするのだろうか、そんな余分な金額について、不払運動で支払いを拒否できないものだろうかと考えたりする。

また、動燃側の話がまったく伝わってこないことにも、なにか無気味なものを感じていた。そして八月末の動燃側による現地調査強行は、その無気味さが、さらに公権力と一体となったものとして、巨大な姿を現わしてきただと思う。機動隊に守られての強行だったというニュースを聞いてムネがムカついたのは私だけだったのだろうか。庶民の血税で生活している警察・機動隊が、なぜ動燃を守る側に立つのか、「八月三十日、三十一日の幌延はさながら戒厳令下の町だった」と旭川市民ニュースは伝えている。これじゃ、まるで戦時中の大日本帝国そのままだを再現していることになるのではないか。強い者に味方する警察、弱い者を取り締まることしか能わない警察とは、民主主義の国におけるそれではな

く、独裁者のもとの国家権力そのものであると考える。

最近、伊藤みえ子美唄消費者協会会長の「反幌延運動について」という話を聞く機会があった。彼女については何の予備知識もなく、北海道消費者協会の仲間内では、異端視されているらしい、つまり左寄りであると評価されているらしい、という話を小耳にはさんでいたのだったが、話を聞いてみると、彼女は、消費者としての立場からあたりまえのことを考え、行動しているにすぎない。それも、だれよりも早くから幌延とのかかわりを持ち、危険を感じとり、抗議運動を展開しているだけなのだ。それが、なぜ異端になるのか、左寄りと評価されるのか。結局、彼女をまともであると認めない北海道消費者協会が右寄りであると強く感じた。「はだかの王様」という童話があるけれど、これは「王様は、はだかだ」という子どもの真実の言葉を、当然のこととして受けとることができなくなってしまうのではないかと私は思う。北海道消費者協会よ、今からでも遅くない、早く目をさませうではないか。

市民運動について、常々いろいろ考える。日本の国民性と合わせて、今現在が限界なの

だろうかとか、いやいやまだ可能性は無限にあるはずとか、考えるだけでなかなか行動が伴わない自分自身もそれに重ねて暗中模索している最中だ。でもその中で最近ボツカリと頭の中に浮かんできたことは、事実を忘れてはいけない、権力に負けてごまかしてはいけないというあたりまえのことだった。権力にのっかって、楽をしたい、社会的名誉を手に入れたいという気持ちもあるだろうけれど、でも、やはり真実から目をそらしてはいけないのだ。

今、北海道の中での幌延を考える市民グループネットワークづくりという言葉に注目している。そうなのだ、まず、女たちのネットワークをつくりだそうではないか。この旭川からはじめよう。今現在、なんと女たちの集まりが多くなったことか。十年前とは隔世の感がある。そのウーマンパワーを結集させよう。党派の別なく、宗教、主義、主張の相違をのりこえ、女がつくり出す未来社会のために行動を開始しなければならぬ。いま、男たちによってつくりだされた社会概念にとらわれることなく、自由にのびやかにしたたかに運動を広げよう。それが同時に女の新しい前進につながるものと確信する。

決してあきらめないこと



那須 友子

最近、続けて二つ同じような感じをうけたものがある。一つは旭川市で開かれた「日本PTA全国研究大会」で、もう一つは土井たか子党首になってからの国会代表質問に対する中曽根首相の答弁である。

両方に共通していることは、質問に対して答える側が問いかけている事柄をまっすぐうけとめて返していると思えない場面があまりにしばしば見受けられたことであつた。答える内容は様々に異なっているのだが、うまくはぐらかしている、またはごまかしている、と思えない答え方をしているところが共通していた。

PTA全国大会の中で私は第九分科会に出席したのだが、その中で、学校の保健室へ単なる疾病以外の情緒不安定、心身症、登校拒否、いじめなどが原因で来室する生徒が多い

こと、また、そのような生徒のためにカウンセラーが必要なこと、等についてレポートして、非常によくまとめたので、さらに突っ込んで親と子のかかわりでどのような点について工夫しているのか具体的にききたいと思ひ質問したのだが、思いもかけない答えが返ってきた。要約すると「親と子の関係は幼児のうちからちゃんとしておかなくてはいけない」というような話で、私が実際にききたいと思っていることはまるきりかけちがつた返答であつた。注意してきいていると、分科会・全体会を通じて質問者が本当に聞きたいと思っていることへの回答になつていないことが多くあつた。しかしその答え方があまりに堂々としていたので、一瞬、このように感じる私自身の感覚が狂っているのだからかと、ふと思つたほどだつた。でも私の隣の人が話しかけてきて「あれは質問の答えになつていないわよね」と言うのをきいて、「こう感じるのには私一人でないのだ」と安心したのだが、注意してみると、レポートを書いた人と発表者は同一人物でないことが多いようで、そのために私の質問にも答えられなかつたように思える。

このほかにも他の人の書いたレポートを代

わつて発表しただけとはっきりわかる場面が同じ分科会の中にあつた。つまりレポートを書いた人は聴衆の中に座つていて、壇上の発表者は質問が来る度に返答ができなくて、レポート作成者に代わつて答えてもらふということがあつた。この場合二人とも女性であつたので、かえつてその点正直であつたと思ひえるのだが、このようなやりとりを見ているうちに、形骸化してしまつた部分が組織の中で出来上がる、その内実を伴わぬ事柄をなんとかがまかしてゆくために、平気で人は質問に真正面から答えようとせず、ごまかし、はぐらかした答弁をするように感じた。

この研究大会と似たような情景が、ニュースは少々ちがうが、TVの国会中継を見ていた時にあつた。私は、社会党の初の女性党首がどのような意見を持っているのか知りたかつたので、土井たか子さんの代表質問をきいていたのだが、その時の中曽根首相の答弁に日P研大会と同じような感じを受けた。

例えば「大型間接税は導入しないと云つていながら、政府税制調査会で『新型間接税』の名で大型間接税の導入を準備している」と追及し、「この問題について逃げずに答えてくれるように」と土井委員長が言っているに

もかわらず、首相の答弁は結局「大型関税は導入しないが、政府税調で論議するのは自由であって、その答申を待って対処する」という紋切型であって、相手の言っていることに對してかみ合った議論をしようなどとは少しも考えていない。そこが日P研大会でみかけた答え方と非常に似ていると感じた。

世間ではこのような返答の仕方はごく普通に見られることなのであろうか。今まで、あまりこの種の会合に出たことがなく、小人数で、本当に思ったことをそのままに話し合ひ形が常であつたのでよけいその差を感じた。

この日P研の大会には、全国から八千人の人々が参集したのだし、国会は日本を動かす法律をつくり、政治、経済を司る国の最高機関であるのに、両者ともに、多数の人々の眼前で公然とはぐらかし、黙殺、ごまかしが行なわれていることに今さらながら驚いている。いくら口で「反対」と言っても、それがどれほど相手に通じるか疑問に思うことがある。

私が高二の時に六〇年安保があつた。私も友人たちと安保について話し合ったものだ。

日本中から起こった安保反対の声と、国会を幾重にもとり囲んだ反対の人々のデモの中で、しかし安保は国会を通過した。そして日

本は今、戦前に逆戻りするかのようになり傾化している。以前は小さくなつていた自衛隊が今は公然と迷彩服を着て富良野の町を行進する写真を私は最近新聞で見た。

このような右傾化の動きを、なぜ私たちは（私は）阻止できないのだろうか。教科書検定の動きも、幌延も、口で反対といくら大声で言っても、実力で阻止しようとしても、機動隊が入つて排除されてしまうのだとしたら、私たちに残された最も有効な方法とは何だろう、と考える。そんなことを考えていた時、ふと思ひ浮かんだ言葉がある。今年の二月の月刊『あごら』にのつていた小沢遼子さんの、「まわりの圧力をはねのけて、自分のしたいことをすればいい」という話の中で「世間がうるさいと言ふけれど、現実には何かやつた時、とやかく言うのは自分に影響を持つ人たち、親とか兄弟とかせいぜい十人以内だ。その十人さえ蹴散らしてしまえば後は簡単だ」ということばである。体制の側はとくにこのような戦法を知つていて、それを使つて自分たちのしたいようにいろいろの物事を變えていつているのかも知れない。どうしても相手を無視できないときだけ、例えば、日本の歴史教科書の中のアジア近隣諸国への侵

略をごまかす書き方に中国・韓国などが強く反発している時だけ、相手が認める形まで後退しているのだから。

自分たちに都合の悪い本は市場から姿を消し（中国大陸で生体実験をした石井細菌部隊をとりあげた森村誠一の『悪魔の飽食』はとくに「自主規制」の形で絶版になつている）、都合の悪いデモは蹴散らし、主要人物は逮捕し（幌延もいづれこういう目に遭うのだろうか）、静かにさせてしまえば、あとはこつちのもの。まだ残っている人たちが少々何か言つても馬耳東風と無視し、やりすごしてしまえばよいと思つてゐるのではないのか。

このようなやり方に反対だ、という時、どうしたらよいのだろうか。その壁に突き当たつていた私は、最近、北海道に住むある人のことばから教えられたように思う。その人は、「決してあきらめないことだ」と語つてゐた。今は私も、どんな事態になろうと決してこれでは終わりだと思わないようにしようと思つてゐる。

しかしこのことについてはまだまだ私の中であやふやな部分が多くあると自分で思つてゐるので、今はいろいろの人や本から多くのことを学びたいと思つてゐる。

8月28日／幌延行

浅野 晃彦

旭川から幌延へ向かう車窓の風景の移り変わりが曇天だったせいもあるのだろうけれど、北上するにつれて、何か、うらさびしさを感じたのは僕だけだったろうか。これから調査地区の地権者である酪農家のQさんに会うという予定がなければ、きっと、道北の北海道らしい広大な風景を楽しんだに違いない。

同行者は平田会員と石田事務局長の二人で、この幌延行の発端は、人からの伝え聞きではあるが「地権者のQさんにまだ接触できる余地が残っているらしい」ということを聞いて、いても立つてもいられないくなったという思いと、作自は異なるけれども、同じ農業を営む者として説得とまではいかなくても少しでも共通の話ができればという思いから、半ば無謀とも思える行動に出たのである。

さて雄信内も過ぎ、国道から道道に入ると、道路の両側には牧草地が広がる。しか

し、その草地の広がりとは対照的に数十メートルおきにカバーをかけた交通標識が立っている。調査資材搬入の時にはカバーの下から駐車禁止の表示が顔を出すのは火を見るより明らかである。しばらく車を走らせると、道端に車が停車しており、中から数人の男たちがこちらをうさくさそうに見ている。なるほどこれが労組のパトロール隊だなと納得し、右折すると、さらにもう一台の車が止まっている。こちらを見ながらトランシーバーを口に当てている。それを横目で見ながら踏切りを渡ると突然石田さんが「この家ですよ」と左側を指さす。

その時、牛舎の中から怒声が聞こえる。「もう帰れ！ 帰らないと警察を呼ぶぞ！」とおじいさんが怒鳴っている。平田さんの話によると、牛の話をしている時は答えてくれたが、貯蔵施設のこととなると「わからない」の一点張りで、しまいには怒鳴られたというのである。それ以上相手を刺激してもと思い、無念さを抑え、仕事の邪魔をしたことを詫びて引きあげた。現在、すべての農業が厳しい状況の中におかれているなかで、同業者として少しでもその苦しみをわかし合うことができればと思っていた



のが、こちらの思い上がりだった。彼らから見れば、僕も都会に住む一人としか映らなかったのだろう。

今回、行ってみて思ったことは、地域の活性化という大義名分のもとに行なわれることが完全にその地域の人間の絆を破壊し、信頼関係をズタズタに引き裂いてしまふということだ。これは過疎よりも恐ろしいということをも、幌延の人は気づいて欲しい。

なお、余談であるが、Q宅を訪問後、幌延町内にある動燃の広報室を見てきた。すでに閉館した後ではあったが、我々を展示室に案内してくれて、職員がつききりで説明してくれた。しかし、その間にすでに閉館時刻を過ぎたというのに見学者風の男が出たり入ったりしていた。きっと私服警官なのだろう。動燃職員の説明に腹をすえかねた平田さんがかなりつつこんだ質問を始めるのと向こうも警戒色を出し始めたので、三十分くらいで事務所を後にした。すると幌延町を出るまで尾行の車がついてきた。豊かな国といわれる日本の立っている土台の、ドス黒い部分にふれた思いがした。

〔旭川市民ニュース〕No.16より〕

肝っ玉おばさんの 悔恨



石田 和子

八月三十一日の幌延抗議集会に参加した二十名中、都合のつく人は翌九月一日の大会集にも参加しようと言袋持参で出かけ、事務所の片隅で仮眠してでもと悲愴な覚悟でおりましたら、幌延地区労の菊地さんのお世話で肝っ玉おばさんの暖かい宿を提供していただけたのです。炊きたての御飯、おいしい味噌汁、充分な夜具、人の真心にふれ元氣百倍、私たちは幌延、天塩と、ちらし配りに走り廻りました。

肝っ玉おばさんの話によると、前佐野町長と浅野氏の町長選の時のこと、百四十票ほどの差で佐野町長が勝ったのだけれど、それには、わけがあったのだそうです。最近の新聞にもちょっと出ていたように、浅野氏は町民病院院長で人望の厚い方、あまりにも良いお医者様のため、病院を辞められたら困るという人々が、心ならずも佐野氏に投票したとのこと、実は私もばかだっ

たから……と、肝っ玉おばさん。また、「さの」「あさの」で書き違えた人もいたらしいこと。「たった七十票ほどの入れ違いでこんな恐ろしいことになってしまった」と私たちにまで詫びるように悔んでおられました。小さな過疎の町の選挙が世紀にわたる問題の岐路になるとは、それにつけてもまた近く迫った幌延町長選の動きが気になる毎日です。

ああ、どうして肝っ玉おばさんかって？ 狭い町のこと、本音をかくして反対って言えない人も多い中で、はっきり反対の態度を示し、右翼の妨害にも平然と立ち向かって実に実に頼もしい方だったのです。帰りに寸志を置かせて頂くとうしましたら、絶対受け取らず、また幌延へ来たら遠慮なく泊りなさい、と気持ちよく見送ってくれました。

〔旭川市民ニュース〕No.16より〕

〈幌延高レベル核廃棄物問題を考える市民の会〉の『旭川市民ニュース』(月一回発行の予定)を購読ご希望の方は、年会費千二百円(送料とも)を添えてへあこら旭川、那須までお申し込み下さい。

核と緑は共存しない

平田 寿子

(幌延高レベル核廃棄物施設誘置問題を
考える旭川市民の会) 会員)

北海道での少し昔の私のくらし

私は中学一年、二年、三年生の男の子ばかり三人の年子をもつ母親なのです。私は牧場で子ども時代を暮らしました。ニワトリ、アヒル、ガチョウ、七面鳥、牛、ブタ、馬、羊、大等々の動物にかこまれて、畑作、酪農の、自給自足的暮らしです。バター、チーズ、ハム、ソーセージ、もちろん、野菜、牛乳、どれも自家製です。羊から毛をとって、糸をより、染色し、手編みのセーター。服は母の手縫い以外着たことがありませんでした。小学校入学の時のカバンやマントだって、母の手づくりでした。水田はしていませんでしたから、牛乳を売ったお金で、お米を買いました。子牛や子羊が次々と生まれ、ニワトリやアヒルのヒヨコたちの黄色のかわいい群が走りまわり、ありとあらゆる木や草が芽をふき、花々で埋まる春。ヒバリの声。麦かりと、乾燥牧草の良い香りと、汗にまみれて多忙な夏。

セミしぐれ。ジャガイモほりの土のかおり、カボチャや大根、白菜、キャベツと秋の収穫は手ごたえの大きな、一年の労働の結晶。澄み渡る空に、牛たちの冬のエサ、サイレーンじづくりに追われる機械の音がひびき渡る。

雪を迎えて、ハム、ソーセージ、ベーコンづくりがはじまる。お正月がすぎると母は、ベチカのある部屋で、毛糸づくりの静かな冬。シンシンと雪が降る。静かな静かな雪の日々。牛乳カンがぶつかりあう音、犬の声。

どの季節にも牧場には四季のいるどりがあふれて、子どもたちは、両親の仕事の手伝いに汗を流して成長したのです。

自家発電。小さなダムがあつて、水路をひいて、小さな水力発電所が、我が家の発電所。我が家だけでは充分余るほどで、近所の方々にたのまれて、無料でご近所にもわけていました。雷が鳴ると、山の中腹にある発電所まで電気を消しにゆく父を、二階の窓から心細く見送ったことを今も鮮明に思い出します。

春さきは柏の葉が一せいに散ります。柏の葉が取水口になまって、電気がだんだん、暗くなってゆきます。ダムまで走って行って、柏の葉を取ります。間もなく電気がまた明るく輝くのです。そんな牧場生活のひとつま

ひとこまに、心おどらせたり、歓喜したり、心いためたりして、いろいろ豊かな精神生活でした。

北海道は冬も長く厳しいということは確かです。ベートーヴェンが「偉大な人は、苦悩をつぎぬけたところに歓喜を手にする」といった言葉に似て、その厳しさのあとの、花と緑にあふれる春、薫風香る夏に出あう喜びは、北国ならではと、私は思つて、こよなくこの北の自然を愛しています。

生態系を知ると、自然が一層、いとおいし私は、自然の中で育ったからか、緑の中にいるとき、それも大きな大きな樹々の中にいる時、心が鎮まる自分を感じました。

大学時代は、思いきり登山に時間を使いました。道内の山ばかり年間百三十日くらいは山に入っていました。結婚し、三人の子どもが生まれた頃、海外登山もしてみようと思い、仲間をさがし、女性だけの山岳同好会をつくりました。四年ほどかけて、計画をねり、訓練をして準備しました。そして、カラコルム山脈(パキスタン、インド、中国国境に位置する世界第二の高峰、K2を含む山域)の二か月半の山旅に出ました。

三人の子どもたちは、三人の友人と、夫と



にあずけて、女性四人で行きました。なにもかにも新しい体験の連続で、充実したものでした。インダス川の最上流部、その昔、アレキサンダーの大遠征の影響とか聞く、西洋人と全くかわらぬ、白い肌と青い瞳、ほりの深い子どもたち。チベット族の顔あり、モンゴル族の顔あり、インド人に近い顔ありで、「人種のふきだまり地帯」といわれるように、あらゆる人種が一堂に会したような不思議な、でも実にうれいような気もしながら、(だつて、きつと人種差別なんて起こらないでしょうね)の旅でした。また、日本の山の緑の豊かさを再認識する旅でもありました。

しかし、当時の私は、それだけ自然の中にひたり、自然が好きでしたが、ほんとうに、自然の成り立ちを理解して、自然を大切に思うことは別だということを知るのは、そのずっと後のことでした。旭川に住むようにな

って、いろいろの市民運動と出会います。そこで私は、自然保護運動をしている方々から、多くのことを教えてもらいました。自然の成り立ち、生態系のこと、森林の働き、土と微生物の働き等、これまでの自然の表面的理解から、自然の内面的、実質的理解によりやく一歩近づくことができたのです。

七年前に、旭川に住むようになりました。へ旭川憲法を学ぶ会に入会しました。そこには、各種の市民運動を展開しておられる方々が、集まっている会でした。

その中に、元原子力研究所の研究員だった人がいました。ある時、彼から、原子力発電所や、核廃棄物が、いかに恐ろしいものであるかを知らされました。はじめて聞いた私には、「どうしてそんな恐ろしいものを作ることを日本人はするのだらう。どうして反対しないのかしら。どうして、私も今まで知らなかったのかしら。マスコミは、こんな大事なことを、なぜ知らせないの?」等々の疑問が次々とわきおこりました。

そこで原子力の実態を学ぶ自主学習会を開こうということで、関心のありそうな方々に呼びかけて、学習会「エネルギーフォーラム80」を継続的に行ないました。

私も全くシロウトですが、「微量放射線の及ぼす影響」について調べ報告しました。

その学習会の中で、「生態系なりたち」を学ぶことになりました。自然保護運動を進めておられる寺島一男先生のお話でしたが、これが、私の自然観や、人生観までもを変えたと思えるお話なのです。

春ニシンがいなくなったのは、

内陸の森林伐採が原因だというお話 皆さんもご存じのように、今から三十年ほど前まで、北海道は、春になると、ニシン漁でたいへんにぎわいました。しかし、昭和二十九年を境に、バツタリと春ニシンの群は、北海道に訪れなくなったのです。

なぜニシンは消えたのか?

いろいろの説がこれまで考えられてきました。乱獲説、海流変化説、太陽黒点説等々です。しかし、それらも、よく調査してみますと、ビタリとあてはまるものは、みられなかったのです。九州大学の水産学部を卒業され、北海道の林野局に勤めながら、「魚付き林」の研究を進めておられた三浦さんという研究者がいました。北海道に来て三浦さんは、ニシンがいなくなったのは森林に関係があるのではないかと考え、研究をすすめたのです。

1986.7.15現在

- 原子力発電所(運転中34基)
- 〃 (建設中)
- 核燃料の施設
- 放射能のゴミ施設

☆ 住民運動でまだつくらせてないところ



ここは原発からでた放射能のゴミをまとめてすてようというところだ。いま、ゴミはドラム缶で60万本ほどある。だが、2000年には、200万本をこえる。そこで、法律をかせ、放射能のレベルが低いコンクリートなどはどこにすてもよく、それより少し高いものは、ちょっとしたみぞをほってうめ、将来、公園などに利用してもよいということになろうとしている。

原発を1日とめると、7～8億円の損害となる。だからむりをしてもうごかす。そのために事故や故障をかくすこともあるんだ。1981年の敦賀原発の事故は、3ヶ月ちかくもかくしたまま運転していたため、海に放射能がたくさんもれたんだヨ

明治6年以降に震度5以上の地震を経験した回数

- A 1～2回
- B 3～4回
- C 5回以上

日本列島は地震の巣だから、安心な場所なんかないんだよ



「海の魚 ニシンと、山の森林と、どうして関係があるのでしょうか。どなたも、そう思いませんか? 「風が吹けば桶屋がもうかる」みたいな因果関係がとてもしやうな気のするこのお話に、ひとまず、耳をかたむけてください。

皆さん、原生林の働きをご存じですか。原生林は、二次林(原生林を伐採した後には育った林)に比べて、二倍もの酸素供給量があります。①多量の酸素を大気中に供給する。また②保水の役割。雨が降ると水をためておく貯水タンクの役割りをはたします。さらに③水の中の栄養成分を供給し、一定に保つという、三つの大きな役割りをはたしてくれているわけです。さて、その第二番目の保水力と、このニシンは大きく関係があったのです。

戦中、戦後の緊急開拓で道北の内陸部は森林伐採が急速に進みました。一方、ニシンは年齢によって、北海道の周囲での回遊コースが、それぞれ決まっています。産卵のために六年―八年もののニシンは、留萌沖にある藻場(遠浅の海の中で海藻がよく茂っているところ)に向かうのです。

留萌沿岸に河口をもつ河川の上流部の森林

日本で原発事故がおきたら



日本での事故例 (1985年)

伐採は融雪期の増水時に、保水力を失ったため、雪どけ水は、表土をけずりつつ、濁流が海めがけて流れました。

藻場に産みつけられたニシンの卵の一部は海藻と共に土砂に埋められたでしょう。土砂に埋められなかった卵が孵化するには水温が上がる必要があります。しかし、濁流は太陽光線をさえぎり、水中の温度の上昇をさえぎったと考えられます。

うまく孵化した一部のニシンもいたでしょう。でも、生まれたばかりのニシンの稚魚はヒフ呼吸をするのですが、コロイド状の土砂がヒフにささりこみ、チッ息させてしまったのです。

うまくそこをのがれた稚魚もいたでしょう。しかし稚魚には一日に三十びきの動物性プランクトンが必要です。その動物性プランクトンが育つために、植物性プランクトンが三万七千びき必要なのだそうです。植物性プランクトンが育つために光合成が必要なのですが、コロイド状の土砂は、またも太陽光線をさえぎり、植物性プランクトンは光合成ができず、死に絶えるよりしかたがなかったのです。したがって、それをエサとする動物性プランクトンが死に絶え、それをエサとする

ニシンの稚魚も死にたえるしかなかったでしょう。

このようにニシンは、人間の森林の大量伐採による泥水の幾重にもかさなるエジキとされたのです。

これは、自然の成り立ちが、いかに広い範囲で関連をもち、複合しながら成り立っているのかを、具体的に私たちに教えてくれる話ですが、なんと心いたむ話でしょう。自然の成り立ちを破壊するのは早く、しかし、一度失った自然をとりもどすことは、できません。そして失うことは、なんと大きいことでしょう。

森林と保水——もうひとつの話

北海道の西北に、小さな島、手売島と焼尻島があります。この二つの島は、面積も、ほぼ等しく、植生も、ほとんど同じ景観だったそうです。イチイをはじめとする桂、イタヤなどの原生林が茂っていたのです。

一九七八年、この二つの島のうち、手売島で水キキンがおこりました。羽幌やルモイから、船やヘリコプターで水が補給されました。ところが焼尻では、全く水がかれなかったのです。

この二つの島も、ニシン漁がさかんだった

頃、ゆたかな森林を、ニシンの魚箱を作るためや、ニシン粕という肥料を作るためにニシンを大量に煮る薪として、大量伐採をしたのです。手売島では、谷あいの伐採しにくいところを除いて、森林がほとんどなくなるほどの伐採をしたのです。一方焼尻島では、森林伐採は行ないましたが、保水考えた伐採だったため、あちこちに原生林が残されたのです。ほとんど自然条件が同じ二つの島に、なぜこのような違いが生じたのでしょうか。

手売島に入植した人々は、山形県人でした。一方、焼尻島は秋田出身の人々だったのです。山形は水田農家が多く、水田では樹は日影をつくり、稲を荒らすスズメのあつまる場所となるので、ジャマものとして、とことん伐採する傾向にあります。三十年近くたって、その結果が水キキンだったのです。一方、秋田県は秋田杉で有名ですが、森林を大切にする習慣が身についていたと考えられるのです。五十年、百年を考えて、自然とかわることの大切さ、また、小さな範囲で自然を考えないこと。

今、地球上には、原始林は失われつつあり、それだけ酸素供給が少なくなっているのです。その上、酸性雨で緑は失われつつあり

ます。緑が失われれば、核戦争を待たずして、多くの生命は失われてしまうのです。

「昔ね、青い地球という美しい星があったんだって」ということにならないようにしたいものです。

自然の生態系、成り立ちを身近に知る二つのお話をしましたが、北海道には今、この自然の生態系を根こそぎくずそうとする、高レベル核廃棄物が、もってこれようとしているのです。

あなたの町で使っているかもしれない原子力発電所からのあかり。あなたの町でも稼働しているかもしれない原子力発電所。その結果出てくる核廃棄物を、北海道にもってこようとする計画なのです。

チェルノブイリの原発事故でばらまかれた放射能は西ヨーロッパ全域を汚染し、ヨーロッパに深刻な事態を生んでいます。国際放射線防護委員会の年間五百ミリレム以下という基準の六倍にも達する放射能被曝による影響が、西ドイツの子どもの骨ずいに起こるものと予想されています。これは、大変な結果を生むでしょう。そのチェルノブイリでばらまかれた放射能量が、一億キュリーといわれています。(一キュリーを三分間身につけると

人は死に至るといわれています。北海道の北のはて、幌延町への計画は四十万キュリーの放射能のつまったキャニスターが、二千本も、すなわち、八億キュリーもの放射能が、運びこまれる計画なのです。

幌延町には東洋一といわれる大規模の乳製品工場があり、乳児用粉ミルクのほかに、学校給良用の粉乳を生産し、全国に出荷されています。あなたの町のあなたのお子さんの口にも、入っているかもしれないのです。

大切なことは、私たちは北海道の幌延町だから反対しているわけではありません。通産省及び、動力炉核燃料事業団は、「日本の科学技術は世界で最もすぐれており、充分に安全なのだから、だいじょうぶですよ」と言っています。そこで私たちは、「そんなに安全ならば、東海村の動燃及び原研の敷地に置くべきだ」と考えています。

そうすれば、わざわざ北海道へはこぶ手間も、経費も、警備も節約できるのです。核ジャックを放ぐことにもなるでしょう。しかし、事実は、危険だからこそ、北海道の北のはてにもってこようという計画なのでしょう。

私たちは、核廃棄物は、発生源で責任をも

って管理することを主張しています。

そしてまだ、安全に管理する技術が確立していない現在では、原発をとめて、すでに出来てしまった核廃棄物を安全に管理するために研究を急ぐべきです。（原発を全く動かさなくとも、日本全体で一八％以上も電力は余っているのです）。放射能は食物連鎖から、生物濃縮し、最終的に人間のところで高レベルになることは、すでに知られているところです。一度環境中に放出された放射能は、何千年、何万年という単位で、生命体を冒しつづけます。

今、ヨーロッパでは

一億キュリーの放射能がばらまかれたチェルノブイリ原発事故の結果、千三百キロメートル離れた西ドイツで、年間予想被曝は、全身被曝が百―二百五十ミリレム、子どもの骨ずいで千七百七十一―二千九百二十ミリレム、肝臓被曝は千五百十一―三千八百ミリレムと試算されています。国際放射線防護委員会の基準では、年間被曝の限度を五百ミリレム以下としています。アメリカの科学アカデミーの出した結論は、「年間百七十ミリレムの被曝は、毎年、最大一万五千人のガンによる死者を出すほか、次代に毎年最大千八百例の重大な遺

伝病をもたらし、数世代後には、毎年最大二万七千件の遺伝的欠陥の出現と不健康者の五％増を招くだろう」と計算し、年間被曝を百七十ミリレム以下にするよう報告しているのです。ヨーロッパの汚染の重大さが、私たちにも深刻なものであることがよくわかります。

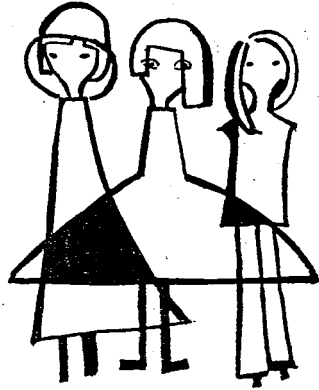
北海道の自然は、地球人みんなのもの北海道の大自然は、あなたの、日本の、そして地球人みんなの大切な財産です。どうぞ一緒に力をあわせて、これを守って下さい。力のある方は力を、お金のある方はお金を、知恵のある方は知恵を、おしゃべりの得意な方はおしゃべりで、この問題に共にとりくんで下さい。拡げて下さい。八億キュリーとさらに生産し続けている放射能を引き受けたくない方は、共に考えて下さい。

緑は生命の源です。核のない未来を子どもたちに!! 緑を残そう子どもたちに!! 私らは日本中、どこへでも、この問題をお伝えしに出かけたいと考えています。

北の国から愛をこめて、全国の方々に。話を希望される方は下記にご連絡下さい。

自らを装う

No. 3



ひたすら、あるがままに

高校生の時、よく遊びに行っていた友達之母親から「これ直子のおふるなんだけど、よかつたら着てちょうだい」と服をもらったことがある。社会的記号としての身なりは、まず第一に生活程度を表すので、いつも同じかつこうの私を気のどくに思ったらしい。こちらにすればTシャツにGパンというのは、ナウいファッションのつもりだったが、ファッションというのには感性に訴えるものだから、

感覚がずれるととんと通じなくなる。

その頃から母親は、飽きもせず同じセリフをくりかえしている。「もっと女らしくできないの、なんなのそのかつこうは……」。なにしろ女がズボンをはくなんて信じられない世代である。

スカートををはかない娘は、まるで男のように映るらしい。母親の言う女らしさを具体化すると、手の加えられた髪、ほどの化粧、

きつちりとした服装、ヒールのある靴、バラスのとれたバッグや小物類となる。右と言われれば左に、いきなくなる性格なので、ばさばさの髪、化粧つけない顔、フカフカの大きめの服、後ろをつぶしたズックというのが基本的パターンで、仕事も外出も区別なし。スカートををはくのは冠婚葬祭ぐらいで、相手をみてからTPOを使いわけ。冠婚葬祭ルックも社会的記号の一端である。小うるさい親類の年寄りを怒らせてもしようがない。母親も親類の範ちゅうに入れてあげれば

やさしい娘なのだが、なにしろ家の中ではバジャマでゴロゴロしているのが好きなのを知っている相手だから、そうはいかない。女だからきれいずきとはかぎらないのである。

「女らしくしてどうするの」と意地の悪い質問してみると、「とにかく女は女らしくするの」と、わけのわからない答えしか返ってこない。もう結婚していて娘が二人いる身(私)であるから、さすがに「玉のこしにのるの」とは言えない。

習慣とか規則とかに疑問をもったときは、破ってみると本質が見えてくる。母は私をよく見せたいのだ。社会的記号としての身なりは、その生活程度を示し、自己表現としては感性や教養を知る手がかりとなるので、かくもしつこく母親は言い続けるのだらう。事実以上によく見せようというのが、化粧を含めた女のファッションである。自分をよく見せたいという気持ちが他者よりもという比較対象をもつとき、それは差別感を養う温床となるのではないだろうか。人には、能力にしても容色にしても、もともと差がある。そこに優劣をつけたとき差別はじまる。ファッション感覚は、ライフスタイルを表す。あるがままに自分らしさを強調したい。(札幌 丹藤正代)

〔新連載〕

働き続けた四十年（講演録）

辻 和 子

RKB（九州放送）の名ディレクターとして活躍された辻和子さんは、七月に長年の職場を定年で去られました。その長い職業生活を振り返った講演『働き続けた四十年』は、四月の「福岡県婦人のつどい」で聴く人の胸を強く打ちました。「均等法以前史」ともいうべき内容、「今様おりん」にも似た、戦後史の中での活躍は、女性史の一コマとしても貴重に思われますので、講演者と主催者のおゆるしを得て、連載することにします。

「働きつづけた四十年」——私は実際に四十年間働き続けてまいりました。四十年と申しますと、私にとって本当に短いような、でも、とても長かったような道のりですが、日本の女の人にとって、女だけではないのですが——本がとても変わったこの四十年間でした。

私はここに一冊の婦人雑誌を持ってまいりました。昭和二十一年の雑誌です。『女性展望』と言いまして、皆さまごろんになっておわかりのように、全くひどい、当時の仙花紙という再生紙で四十ページの、こんなうすっぺらな雑誌です。でも中身は大変しつかりしていて、表紙は、三岸節子さんの描いた絵で、非常に程度の高い内容になっております。それに面白いのは昭和二十一年——終戦の翌年ですのに、オパレスクネイルポリッシュといって、爪のポリッシュの広告が、あの有名な原節子さんの写真で出ています。

この雑誌と、今一番新しい、重くて持てないような『家庭画報』とを比べてみますと、今はすばらしい印刷技術ですね。内容は全部が全部すばらしいとは言えないかもしれませんが、こうした婦人雑誌の推移を見ただけでも、この四十年間の移り変わりがおわかりいただけると思います。

さて、私が働き始めましたのは昭和二十一年からですが、二十一年の春まで、国民生活学院という学校で勉強して

いました。この学校は 中央公論社の前社長の、嶋中雄作さんが作られた大変私塾的色彩の濃い学校でして、戦時中とは思えないような自由な気風がただよっていました。例の「大詔奉戴日」には宮沢賢治の「雨ニモ負ケズ……」をみんなで朗読するといったような、自由学園と文化学院とを合わせたような学校で、その後の私の生き方に大きな影響を与えたのではないかと思います。

さて、最初に勤めたのは建築の本ばかりを出している出版社でした。父親が職業軍人で、公職追放、文筆追放でしたから、特攻隊から帰ってきた兄と私が働いて父母に仕送りをし、妹を女子大にやっております。

その出版社に勤めている時、「働く私たちの家計簿」というのに投稿をいたしましたところ、生まれて初めて自分の書いたものが活字になりました。こんなポロポロの雑誌ですけれど、今まで大事にとっておいたわけです。しかし、社長と専務の二派に分かれたりするような事情があって、そのことをきっかけにその出版社をやめまして家におりました。

そこに松岡洋子事務所を手伝ってくれないかというお話がきました。松岡洋子さん、といっても、若い方はご存じないかもしれませんが、戦争直後、昭和二十一年に結成された「婦人民主クラブ」の委員長で、戦前にアメリカで勉強された方です。エドガー・スノーの秘書やパール・バックの秘書などもされ、戦後、評論家として活躍されましたが、さきほどお話した生活学院の生徒主事だった関係で、その事務所をお手伝いするようにとお話がきたのです。当時、松岡さんは大変売れっ子でした。松岡洋子事務所は毎日会館の中にありまして、そこで「婦人民主クラブ」の事務と「婦人民主新聞」の編集との両方を兼ねてやっております。

そのため、私自身は松岡洋子事務所に働いていたのですが、松岡さんの仕事をしながら「婦人民主クラブ」の仕事と「婦人民主新聞」の編集も手伝いました。

「婦人民主クラブ」というのは、戦後、最も早い時期に出来た婦人団体で、その創立者の一人である宮本百合子さんの、「婦人民主クラブは、民主的婦人の集まりではなく、婦人たちが自身の民主化を求めた集まりである」という言葉のよりに綱領も作られております。「封建的な思想や政治・習慣に対して、その解放のために戦う。職域・地域及び家庭における新しき自主的生活の展開のために協力する。婦人の抑えられたる全能力の發揮を期し、日本の輝かしき民主化の達成のために進む」——そういう三つの綱領のもとに、創立当時のメンバーは、羽仁説子さん・加藤シズエさん・

榎田フキさん・山室民子さん・山本 杉さん・赤松常子さん・松岡洋子さん・佐多稲子さん・宮本百合子さんが中心となっておりました。

狭い部屋でしたが、有楽町の毎日会館の中にありまして、当時は終戦直後ですから有楽町のガード下には夜の女がいたり、その中には「ラク町のお時」さんという街頭録音で有名になった人もいて、街角には浮浪児の靴みがき少年があふれ、戦後のただならぬ熱気のようなものが街にうごめいていました。

この中で、私たちは、榎田さんのことをおばちゃん、宮本さんのことを百合子さん、松岡さんのことは洋子さん、佐多さんのことは稲子さんというふうに、私たちのようなたいへん若輩の者までが名前で呼び合うといった、民主的で活気にあふれた事務所でした。私は十八か十九ですから、まるで子どもみたいでしたが、それから五年、この事務所で働いたことは、今の仕事や、その後のものの見方、生き方に大変大きな影響を与えられたように思います。

さっき申しましたように、当時は普通の勤め帰りの人が夜の女に間違えられたりするような世情でもあり、二・一スト、帝銀事件、下山事件、三鷹事件、そして松川事件など、すべて私が松岡さんのもとに居た時に起こった事件です。このようなジャーナリストイッキな問題を敏感に受けとめる場所で五年間勤めたことは、私の生き方・考え方にかけがえのない影響を与えたと思います。(つづく)

TOPICS / とびつくす

●女子は全雇用者の三五・九％、ただし賃金は男の五一・八

61年版『婦人労働白書』によると、女子の雇用者は一五四八万人となり、前年比二％増、雇用者全体に占める比率は三五・九％と、前年より、○・三ポイント上昇、昨年に引き続き、雇用者が家事専業者を上回り、「既婚者も働く」状況はほぼ定着。

しかし新卒者とパートを除く女子の求人数は前年比二・二減％。パートは雇用女性の二二％、三三三万人に。全雇用女性の平均賃金は男性の五一・八％、半数以上が百人以下の中小零細企業に就労。一方、ワープロ、パソコン等の在宅勤務者は増える一方ですが、家内労働法

で定める内職者でもなく、統計上でも把握していないなど、問題は山積しています。

ただし、「婦人の十年」の十年間を見ると、四二二万、三五％増で、この間の男子雇用者の伸び(三二二万人、一二・四％)をはるかに上回っているだけでなく、一九六五―七五年の高度成長期の女子雇用者の増加(二五四万人、二七・八％)を上回っており、またこの十年で管理職は六五％増、専門技術職は六〇増と、目覚ましい進出。

なお、諸外国の女子雇用者率は、スウェーデン四八・〇、米国四四・〇、英国四一・八、西独三八・六で、いずれも日本を上回っています。

●母子保健法への布石始まる

母子保健法「改正」の今国会上程は、激しい運動の結果見送られたが、代わって「地方公共団体の事務整理・合理化法案」上程が閣議決定。これが通ると、財政難を理由に、母子保健事業を医師会などに委託する自治体も出てくるのでは、と心配されています。

●労基法改悪案、来春国会上程へ

「一週の労働時間を四十五時間に短縮、一週の労働時間を各日に割り当てる」ことを骨子とする改悪案上程がすすめられています。フレックスタイム制の導入等、耳ざわりはよいのですが、実質的には一日の労働時間の延長を認めるもの。しかも、時間外労働の規則はなく、特に女子や病弱者には大問題。

●「低所得者と共働きは増税」のふしぎな「減税」案

マル優廃止、間接税実施を財源とする「減税」案は、給与所得者の八〇％が「増税」で、実質減税は年収五五〇万円以上の層だけ。

●「パート未組織労働者連絡会」が「専業主婦特別控除」に反対の請願

①専業主婦の「内助の功」のみを評価するのは、働く妻の家庭での努力を無視する差別。働く妻と働けない妻の社会的分断を招く。②七九年、八〇年に「時給労働者に対する所得税控除の倍額請願」をしているが、今回は一見似ているようで影響は全く反対、が主な理由。

●中曽根、女性べつ視発言に（五十一）（旧称四十八）団体が抗議

「女性はネクタイの色しか覚えていない」に、全国組織女性団体が抗議。国会でも中西珠子氏らが追求。答は両方とも「ユーモアです」。

●総理府調査に「家庭科共修の会」が抗議

九月一日発表の「家族・家庭に関する世論調査」は調査意図が不可解と質問、「均等法を背景に実態を調べたが、役割分担を練る項目案は吟味が不十分だった」と、総理大臣官房広報室の参事官も、男性四人で質問を作成した実情を告白。

●自治体に女の議員をふやす運動を

竹村泰子さんらの呼びかけで「政治の流れを変える女たちの会」が発足。草の根市民の候補者を知らせてほしいと連絡を待っています。

〔連絡先〕東京都千代田区丸の内3の4の1新国際ビル9.28号竹村事務所（032162680）

●転出証明書は「男が先」

国立市の宝月ちか子さんが、七月十四日転居のため市に転出証明書を求めたところ、第二子の男子が第一子の女子より先に記載されました。「コンピュータにより、三月から出生の順に関係なく男子が先に記載されている」との市民課の回答にア然、仲間と抗議、七月三十一日から「出生順」に変更されましたが、三月から始まったアウトブットのおかしさに、それまで誰も気づかなかったとは……（「あす」9月18日号から）。

●女性合格者、公務員一級一八八人、上級外交官三人

どちらも史上最高の「大量」。合格者総数は、前者が一七一（七・四％）、後者が二八一（一〇・七％）。

〔編集後記〕

「いま、旭川からは幌延問題が最もよく似合う」——例会で最終的にそう判断して、精一杯、この問題に迫ってみました。

〈幌延高レベル核廃棄物問題を考える旭川市民の会〉から、平田寿子さん、石田和子さん、浅野晃彦さんらの寄稿を得、おかげで質量共にボリュームを増すことができました。

ところで、四頁のカット、普通の時計じゃないことにお気づきでしたか？ 既にお気づきの方は百八十度逆転による発想の素質充分。言われて気づいた人も訓練次第で伸びる素質があります。

（ナーンチャッテ）。

（田代 慶子）